

タイトル：五人で行く旅行は、まだないけれど…

学校名・学年：関西創価高等学校・2年

名前：坂口 佳恵

(本文)

私が小学二年生のとき、妹が生まれました。ずっと妹がほしかった私は、家族と一緒に跳ねるように喜びました。学校帰り、お母さんと妹がいる病院へ向かったあの日。いつもと違う帰り道を歩く優越感。病院に入るとき、熊鈴の音を手で押さえて胸の奥でワクワクが膨らんでいくあの感覚。妹とお母さんを見ると夏の暑さが吹き飛ぶくらい嬉しかったです。

妹は三歳くらいまで、とても静かで大人しい子でした。あまり喋らないことも、「きっと成長がゆっくりなだけ」と思っていました。けれど、三歳児検診の日。お母さんから聴いた医師の言葉は、私たちには重すぎる響きをもっていました。

「自閉症スペクトラム症、ADHD、睡眠障害——。」

さらに、保育園に上がる前の検査では

「軽度から中度の知的障害」

という診断。意味を全部理解できたわけではありません。それでも、胸の奥が冷たい水で満たされるような感覚と、「普通」という道が私たちから遠ざかっていく音を、確かに感じました。

成長するにつれ、妹の特性ははっきりと表れました。

買い物に行こうとしても、気に入らないことがあると奇声のような声を上げて動かなくなり、スーパーの通路で立ち往生しています。夜は眠れずテレビをつけることもあり、家族全員の眠りが奪われます。言葉が通じないもどかしさから、泣き叫ぶこともありました。変化に弱い妹と一緒にだと、家族そろってのお出かけは難しく、私の十七年間で、五人そろって旅行したことはありません。夢見てきた外出は、今も棚の奥にしまわれたままです。周りの友だちのように家族との思い出が少ないことが、今でも辛くなることがあります。

何よりも、妹が泣き叫ぶときに浴びせられる周囲の冷たい視線が、私を刺しました。それは私に向けられたものでなくても、「邪魔者を見る」ような眼差しが、大好きな妹に向けられているのが耐えられませんでした。

でも、一番頑張っていて笑顔が素敵なお母さんは、時々悲しそうな、つらそうな眼をしています。

「手が痛いせいで働けなくてごめんね」

「ちゃんとお小遣いあげられてないよね…」

——そんなふうにお母さんは言います。

「もし、ママが亡くなったら、ともちゃんをよろしくね」

と最近をよく私と弟に言っています。私はそのたびに、大好きなお母さんとの時間が亡くなってしまいそうで、胸がしめつけられます。不安から出る言葉だと分かっているけど聞きたく

ない言葉です。

寮で生活している私は、必要な時だけお母さんにお金をお願いしています。先日、部活動で遠くに行くから振り込みを頼むと、LINEで写真が送られてきました。千円札、五千円札、一万円札が扇子のように広がった写真です。それは、リウマチで痛む手を我慢しながら、かけ持ちの仕事で一生懸命に貯めたお金なのだとわかりました。その写真には、「振り込み遅くなってごめんね」というメッセージが添えられていました。

——私は、その「ごめんね」が嫌です。お母さんには事情があるのに、謝らないでほしい。心まで痛めて私たちのために無理をしないでほしい、そう思います。

他にも胸の詰まるような思いを抱くことがあります。祖母は、時に少し強い口調で母の負担が大きすぎるのではないかと口にします。母もまた、諦めをにじませながら不満をこぼすことがありました。

でも、今は分かります。祖母は、母の負担を心から心配していた。お父さんはちょっぴり家事が雑だけど、おいしいご飯も作ってくれるし、私たちの送り迎えをしてくれます。だけど、妹の細かいところまで気づけなかった。母は仕事と妹の世話に追われ、自分を追い込み、持病のリウマチを悪化させてしまった。それでも、私や弟の学費を気にかけ、無理をして働いています。だから、欲しいものがあつたときには、母に負担をかけないように自分のお小遣いで買っています。私は、そんな母の苦しさに気づけなかった自分を情けなく思います。

妹にも事情があります。祖父母にも、父にも、母にも、私にも事情があります。誰にでも、その人にしか分からない「事情」があります。きっと、冷たい視線を向けてしまった人にも事情があります。

泣いている子に冷たい視線を向けてしまったのは、その子や家族の「事情」を知らなかっただけかもしれません。人は疲れていれば、小さな行動にも苛立ちを覚えることがあります。だけど、相手にも必ず見えない「事情」があることも、忘れないでほしいです。

障がいはい、誰かのせいではありません。誰か一人が背負い込むべきものでもありません。それぞれが抱える「事情」を理解してみんなで支え合うことが必要です。

妹を通して私は知りました。優しさは、相手を想像すること、思いやることから始まるのだと。そして、その思いやりは、世界を少しずつ変える力を持っているのだと。

今、九歳になる妹は、明日や明後日、クリスマスがいつ来るのかもわかっていません。それでも、たしかに成長しています。毎日楽しそうに養護学校から帰ってきているそうです。泣き叫ぶこともなくなりました。私の大好きな妹の変化は、家族や周囲の人たちの理解と協力があってこそだと、実感しています。

——五人で行く旅行は、まだ叶っていません。遠くに行けなくても、大好きな家族との楽しい思い出はたくさんあります。同じ時間を重ねながら、それぞれの「事情」を抱えながらも、笑顔で支え合っています。その待ち望んだ光が射すまで、私は歩み続けます。父と母と弟と妹と幸せな思い出を積み重ねられるように——